

編集後記

66巻3号をお届けする。新型コロナウイルス(COVID-19)感染症は、本稿を執筆している2020年7月31日現在、日本国内の感染者数が過去最多を更新しており、なお憂慮すべき状態が続くものと思われる。既に本学会HPで告知している通り5月30・31日開催予定の第121回大会(日本医科大学, 志村俊郎実行委員長)は12月19・20日に延期となったが、その開催方法など細部については今後の推移を見計らいながらなお検討中であるので、本学会HP等の情報に対する注意喚起を促したい。また、例会も3月以降、中止が続いているが、来る9月26日には鶴見大学会館において神奈川地方会秋季例会と日本医史学会の合同例会を開催すべく準備を進めているところである。本学会としても、感染症流行の状況下であって、医史学研究の視点から少しでも有用な情報等を届けるべく努めていることを知っていただきたい。私自身のこの数か月を振り返ると、勤務先の大学の授業と会議はオンラインによって何とか半期を乗り切り、これはこれで成立すると感じた半面、この状態が長期化し常態化することには、さまざまな危機感も感じ始めている。私自身がこの状況に適応し変わっていく必要があるのは確かだが、院生の研究指導など対面による意思疎通がたまにはあった方がよいと思うケースもあり、より有効な方法をしばらくは模索することになるのだろうと思う。資料調査に関しては国内・国外を含めてかなり不自由になってしまった。あらためてインターネット上の情報(私の場合は古文書の画像データ)に頼ることが増えたこと、また自分の所属機関・関係機関の資料やこれまで取り溜めたデータを見直すことが増えたことを自覚する今日このごろである。催事が減り、在宅時間が増えたことによって、忙しくなったか、暇になったかは人それぞれであろうが、時間が出来た会員諸氏には、ぜひこの機会に研究成果をまとめて本誌へ投稿されるよう期待したい。

(町 泉寿郎)